模範裁縫教科書

四

株式會社
三省堂

375.95
0 89
2B

375.95
089
2B

模範裁縫教科書

大妻コタカ著

貳

株式會社
三省堂

3463
東京都千代田区 大東文化学院図書館
3463

（前）着り参宮　入綿身つ一　（後）着り参宮

はしがき

一、本書は、高等女學校教授要目に準據し、高等女學校及びこれと同程度の各種學校の裁縫科の教科用書に充てたいために編纂したものであります。

二、本書は、實際教授上の便宜から、文部省教授要目の順序を變更し、且つ要目に掲げられてゐないものでも實際必要なものは之を附加しました。

三、本書は、四箇年又は五箇年の高等女學校のいづれにも適切な教科書とするために全體を五卷に分け、第一卷から第四卷までは和服、第五卷を洋服として、各學年の配當は次のやうに致しました。

四箇年程度の學校では、第一學年には第一卷、第二學年には第二卷、第三學年には第三卷、第四學年には第四卷と第五卷とを併用させます。

又五箇年程度の學校では第一卷から第三卷までは、前者と同樣に扱ひ、第四卷と第五卷とは第四・五學年を通じて併用させます。

四、本書は、多年の經驗と研究とを基として、種々の方法の中から最も一般的と思はれるものを採用し、徒に理論に走らず、流儀に囚れないやうにいたしました。

五、從來、使用の鯨尺・曲尺がメートル法になりましたので、これまでの寸法については適宜にこれを取捨し、學習者の實習と記憶とに便利なやうにいたしました。

大正十五年十二月

著者　しるす

模範裁縫教科書　卷二

目次

第一章　一つ身綿入……一
第二章　本裁女物袷……一三
第三章　寒冷え知らず……二六
第四章　本裁男物袷……二九
第五章　女　袴……三七
第六章　綿布の繕ひ方……五七
第七章　本裁女物袷長襦袢……六一
第八章　一つ身袖無し綿入羽織……七〇

教授要目

注意（　）の中の字は卷數を示したものであります

學期 ＼ 學年	一學年	二年用	三學年	四學年	五學年
第一學期	基礎的技術……（一） 襦袢……（一） 本裁女物單衣……（一）	一つ身綿入……（二） 本裁女物袷……（二） 寒冷え知らず……（二）	本裁女物袷羽織（三） 女物單衣合羽……（三） 腹合帶……（三）	男袴……（四） 男物單衣羽織……（四） 薄物單衣……（四）	本比翼（三分ノ一）（四） 附比翼（三分ノ一）（四） 單衣重ね（三分ノ一）（四） 男兒シヤツ ヅボン下……（五）
第二學期	本裁男物單衣……（一） 四つ身單衣……（一） 四つ身袷……（一）	本裁男物袷……（二） 女袴……（二）	紺布・毛織の縫方……（三） 本裁女物綿入……（三） 本裁男物袷羽織（三） 中小裁羽織被布の裁方……（發展）（三）	子供洋服について……（五） 子供服寸法とり方……（五） 子供服下着類……（五） 女兒服……（五） 男女兒帽子……（五） 丸帶……（四）	袷半コート……（四） 男帶……（四） 小學生服……（五） 女學生服……（五）
第三學期	子供帶……（一） 下穿……（一）	綿布の縫方……（二） 女物袷長襦袢……（二） 一つ身袖無羽織（二）	足袋……（三） ミシン使用法……（三） 婦人シヤツ……（三） 涎掛と子供前掛（三） 割烹前掛……（三）	小袖・模樣・紋について……（四） 小袖袷重ね……（四） 涎掛と子供前掛（三） 男兒服……（五）	男學生服……（五） ケープ……（五） 女兒外套……（五） 夜具類（發展）……（四） 大巾物裁方（發展）（四）

模範裁縫教科書　卷二

第一章　一つ身綿入

❶ 普通仕立上げ寸法

袖　丈　二五―五〇糎（淵袖）　後　巾　いつぱい
　　二五糎（元祿袖）　前　巾　いつぱい
　　二三糎（筒袖）　衽　下り　一〇糎
袖　口　一三糎　衽　巾　いつぱい　一三糎位
袖　附　一三糎　合　褄　巾　衽巾より五糎つめる
袖　巾　一八―二四糎　衿　肩明　三―四糎
身　丈　七五―八七糎　衿　巾　三糎五糎
身八つ口　一〇糎　衿　下　一八―二三糎

袖口　袍　五粍　　裾　袍　一糎

㊁　裁ち方と積り方

一つ身は一・二歳の子供の着物で、大・中・小があるけれども、概して並巾一反で凡そ三枚を裁ち得るものである。

その裁ち方には、棒衽裁・鈎衽裁等がある。

一圖は兩面物で裁つに適し、二圖・三圖は棒衽裁であるから、片面物にも用ひられる。又どの袖の裁ち方にも用ひられる。

積り方はそれぞれ公式に示す通りである。

裏の裁ち方は通し裏の物は身丈と衽丈を表布より、袍の二倍だけ長く要す。

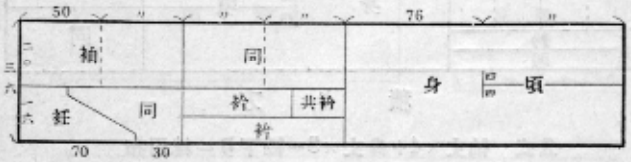
㊂　標附け方

一、表袖（潤袖）中表にして一枚づゝ山から折つて兩袖を重ねて置き、袖丈・袖口・袖附袖巾・山の順に寸法通り標をつける。

一つ身潤袖鈎衽の裁ち方（兩面物）

用布並巾　3米52糎

一　裁ち切り袖丈50糎　衽下り6糎



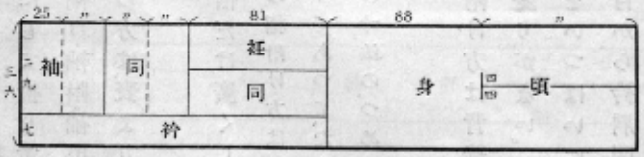
積り方

公式　袖丈×4＋身丈×2＝總用布

（總用布－袖丈×4）÷2＝身丈

一つ身筒袖の裁ち方

二　裁ち切り袖丈25糎　衽下り7糎

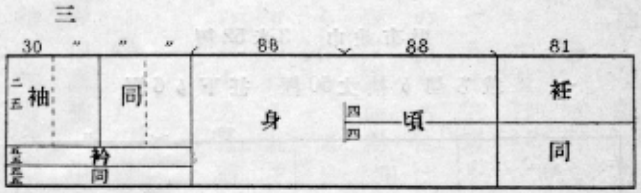


積り方

公式　袖丈×4＋身丈×3－衽下り＝總用布

（總用布－袖丈×4＋衽下り）÷3＝身丈

一つ身筒袖別袵の裁ち方



積り方

公式　袖丈×4＋身丈×3－袵下り＝總用布

（總用布－袖丈×4＋袵下り）÷3＝身丈

二、裏袖　表袖と同樣にして折り重ねる。

表袖に準じて、袖丈・袖口・袖附・袖巾・山の標をつける。寸法のつめ方は、表より袖丈を四糎つめる。

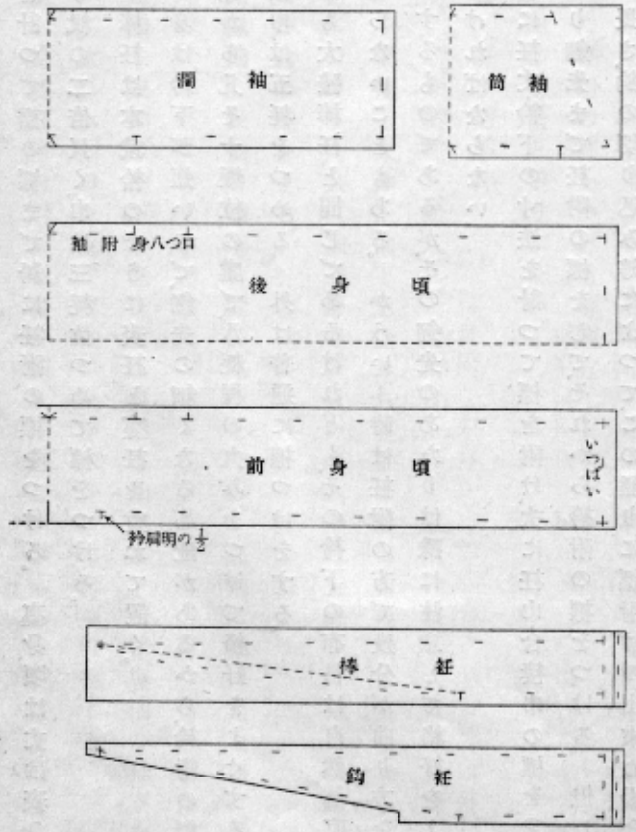
袖巾は袖口袵の二倍だけ廣くして置く。

注意　元祿袖筒袖の標附け方は四つ身の章で述べた通りであつて、ただ綿入であるから裏袖の寸法のつめ方を加減すればよい。

三、身頃　後身頃の標附け方は背縫が無いだけで他は四つ身と變りがない。

前身頃は裾に前巾をいつぱいに標をつけ、袵下りの處で裁ち目から衿肩明の二分の

標附け方圖



一を計つて、裾の標まで斜に衽附の標をつける。裏身頃は丈は表身頃より紕の二倍長く、巾は三糎位つめて標をつける。

四、**衽**　棒衽は本裁袷のやうに表衽と裏衽を重ねて置く。

一つ身は衿下が短いので、劍先の細くなる心配があるから、衿附の標は劍先から凡そ十糎位の處で、八糎程の丸みをつけて格好をよくする。

合褄巾は五糎をつめる。外は普通に標つけをする。

鈎衽も大體棒衽と同じであるけれども、その衿下の布目は自然眞直ぐにならないこともある。かういふ時は衽附の方で幾分か曲り方を少なくするものであるが、その劍先のあたりは殊に注意して格好をよくしなければならない。

最初に衽丈・衿下の寸法を計つて標を附け、次に衽巾・合褄巾の標をつけ、裾より劍先まで衽附の標をして、それから衿附の標をつける。但し鈎下の長さ、鈎の切り込み等によつて、この通りに標附けの出來ぬ場合は衽丈・衿下の寸法を計つて標をつけ、次に衿附・衿下の縫ひ代の標をつけ、最後に衽附の標をつける等適宜工夫をする。

五、**衿**　四つ身袷と變りがない。

㊃　縫ひ方順序

一、袖。二、身頃。三、綿入れ。四、紮け上げ。五、附け紐。六、背守り縫

一、**袖**　イ、**潤袖**　表袖の袖下を縫ふ。裏袖に袖口布のつくものならば最初につける。次に袖下を縫ひ、次いで八つ口を縫つて袖口及び八つ口の含み綿をする。

ロ、**元祿袖**　表袖の袖下を縫ひ、丸みを作る。裏袖に袖口布を掛け、袖下口を縫ひ、丸みを作り、八つ口を縫つて袖口及び八つ口の含み綿をする。

ハ、**筒袖**　表袖の袖下を縫ひ、次に裏袖に袖口布をかけ、裏袖の袖下を縫ふ。次に八つ口を縫つて袖口及び八つ口の含み綿をする。

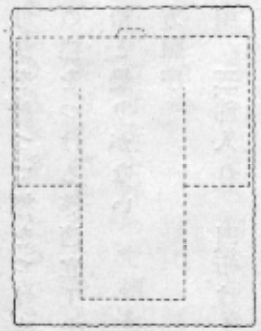
二、**身頃**　脇縫・衽附・衿附をし、裏身頃も裾廻し附のものは、胴接ぎをして表

身頃と同樣に縫ひ、丈を比べて裾を合せ、裄を作ること等袷と同じである。身八つ口を縫つて綿を含め、袷と同樣に袖をつける。

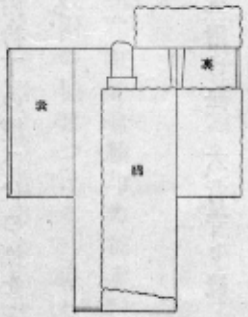
三、綿入れ　綿入れ方の順序は表の後身頃及び後袖に圖のやうに入れ、袖口・八つ口及び裾の綿の整理をして引返し、前裏身頃の裏を出して綿を入れ、前表身頃を被せる。前身頃は、右から入れ次に左を入れる。裾綿は三枚位を程よく重ね、裾の總巾より四糎位長く切つて二つ折にする。この袵綿を弛く袵山に入れてから續いて居る綿を折り返して被せる。眞綿を引くには引つれたり、むらの出來たりしないやうによく注意して引くことが大切である。

綿入れの圖

(一)後の表身頃の裏に入れた圖



(二)片身頃に入れた圖

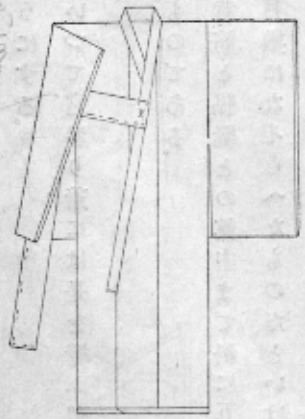


四、紮け上げ　まづ裾の假とぢをし、次いで衽とぢ、衿下とぢ、衿紮、袖口紮をする。裾とぢの針數は裏の後巾に五針、前巾に二針、表はその外に倘その間にも針目を出してする。但し針數は巾の廣狹によつて定めるものである。

五、附け紐　紐を附けるには男兒は、紮け目を下にし、女兒は紮け目を上に向けて縫ひつけ、飾り躾をかけるには圖のやうにする。附け紐の高さ

紐の躾の圖

女兒附け紐の圖



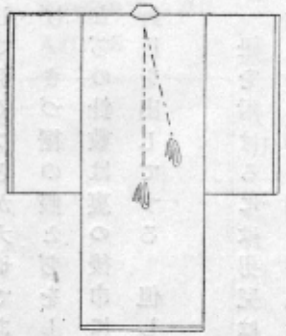
は紐の端が身八つ口の中に入るやうにする。

六、背守り縫　一つ身には背守り縫といつて、宮參り着には是を縫ふ習慣がある。

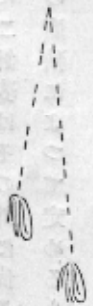
男兒には雌針、女兒には雄針を縫ふものである。

背守りの縫ひ方は背の眞中に七針、背筋と脇縫との眞中まで斜に五針、合計十二針を縫ふ。これは一年の月數になぞらへたものだといはれてゐる。

女兒背守りの圖



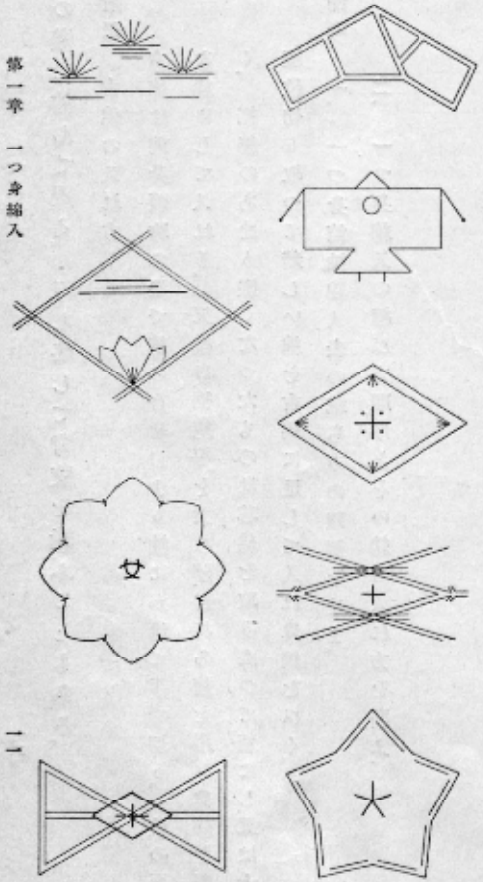
男兒背守りの圖



これを縫ふ糸は、五色か又は赤白の身丈よりも長い糸で縫ひ、圖の樣に、結んで置くのは子供の長命を希ふ緣起であるといふ。

その縫ひ方は裾から計つて身丈の三分の一の處を縫ひ始めとし、衿附の一糎五粍下までに七針を縫ひ、それから斜に五針を縫つて糸の端は

背紋の圖



圖の樣に結んで置く。但し略して背紋を縫ふこともある。

附記　古綿の入れ方

古綿は前身頃胸の邊で綿の合せ目より袖にかけて手で切り、一枚の平な綿にして入れる。又袖口、裾綿等を柔らげ、目打ち綿を用ひ眞綿を引く。裾綿のあまり堅くなつたものは芯綿を取り去つて新にし、又は十種位切り取つて新しい綿を古綿に足して入れ、眞綿をひく。

備考　一、一つ身筒袖綿入表の裁ち方の圖解をせよ。

二、一つ身綿入の縫ひ方順序とその綿の入れ方を問ふ。

第二章　本裁女物袷

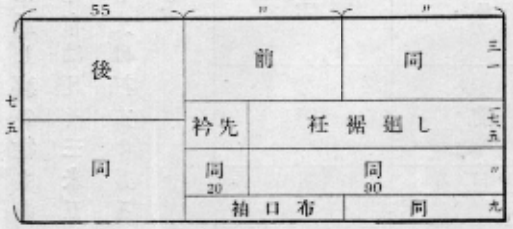
㊀　普通仕立上げ寸法

袖丈	六〇糎	衽巾	一五糎
袖口	二三糎	合褄巾	一三糎五粍
袖附	二三糎	衿肩明	八糎五粍
袖巾	三二糎	衿巾	一一糎五粍
身丈	一米五〇糎	衿下	七〇糎—七五糎
身八つ口	一三糎	衩	六二糎
後巾	二八糎	裾	六粍
前巾	二三糎	袖口	二粍
衽下り	二三糎		

㊁　裁ち方と積り方

裾廻しの裁ち方

用布大巾　1米65糎

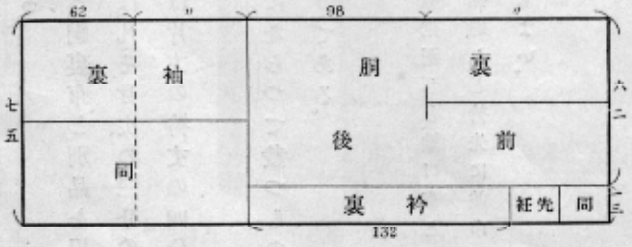


積り方

公式　總用布÷3＝裾廻し丈

胴裏の裁ち方

用布　大巾

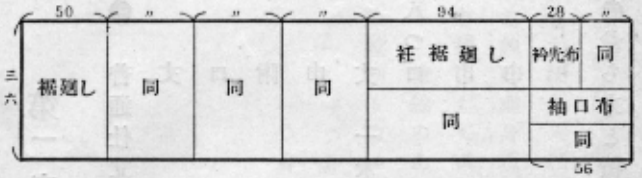


積り方

公式　袖丈×2＋胴裏丈×2＝胴裏總用布

裾廻しの裁ち方

用布並巾　3米50糎



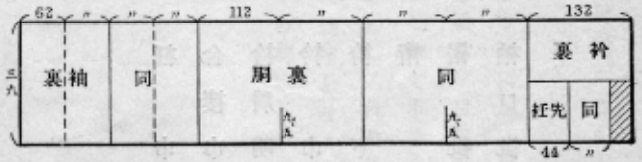
積り方

公式　裾廻し丈×4＋衽裾廻し丈＋袖口布＝裾廻し總用布

50　×4＋　94　＋　56　＝　350

胴裏の裁ち方

用布　並巾



積り方

公式　表身丈－裾廻し丈＋縫ひ代＋袱×2＝胴裏丈

152　－　50　＋　8.5　＋.6　×2＝　112

（表衿丈－衿先×2）＋接き代×2＝裏衿丈

（　178　－　28　×2）＋　5　×2＝　132

袖丈×4＋胴裏丈×4＋裏衿丈＝胴裏總用布

表用布の裁ち方は、本裁女物單衣に同じである。

○裏用布は、通し裏の物もあるが、多くは裾廻し布と、胴裏布と別品を用ふ。裾廻し用布は凡そ三米五十糎を用ひ、裾廻し丈は、凡そ身丈の三分の一位。衽裾廻し丈は、衽丈の凡そ三分の二位。衿先布は、片方の衿丈の四分の一位にする。

裾廻しの裁ち方

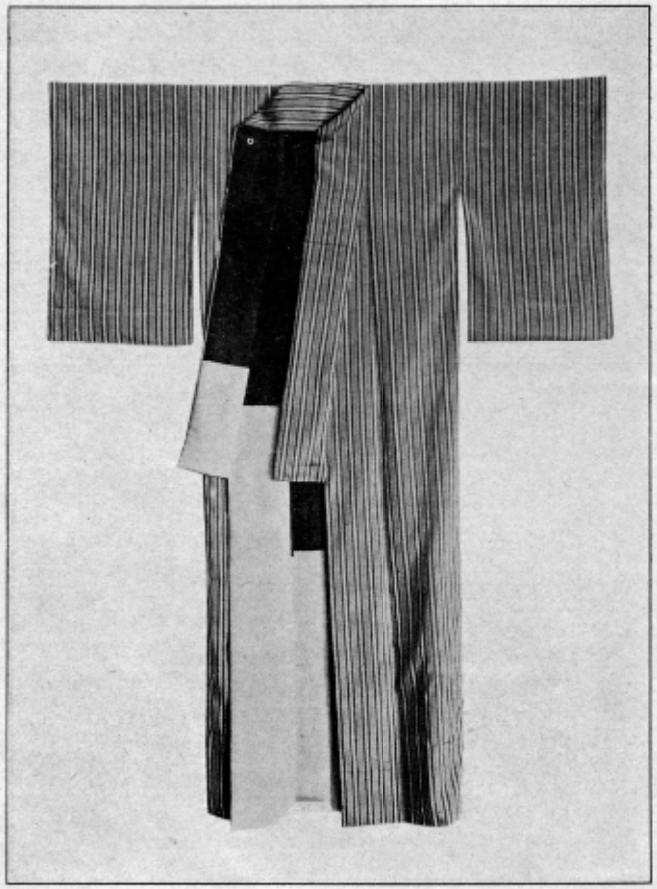
	55	〃
後		同
前		同
袖口布		同

	110	
	90	20
衽裾廻し		衿先布
同		同

凡て裏は表にならつて裁つもので公式に示す通りである。

注意

後及び前の裾廻しと、袖口布とに大巾を用ひ、衽裾廻しと衿先に並巾を使つて裁つてもよい。



袷物女裁本

㊂ 標附け方

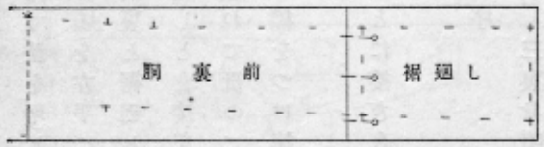
一、**表袖**　中表にして一枚づゝ山から折つて兩袖を重ねて置く。袖丈・袖口・袖附・袖巾・山・丸みの順に標をつける。

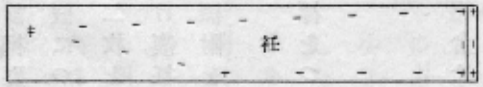
二、**裏袖**　表袖と同樣にして折り重ねる。表袖より丈を二耗・袖口二耗・袖巾二耗をつめ、他は同じに標をつけ、次に袖口布を重ねて、袖口巾並びに袖口丈の標をつけ、而して八つ口布をつける場合は、袖口布と同樣にする。

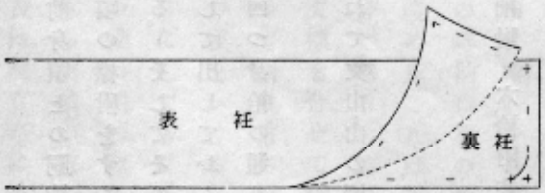
三、**表身頃**　本裁女物單衣に同じ。

四、**胴裏と裾廻し**　凡て表身頃に準じて標をつける。裾廻し布を四枚重ね、裾口を右にして圖のやうに重ねておき丈・巾の標をつける。但し巾は表より二耗つめる。胴裏も同樣にして、袖附・身八つ口・巾・山の標をする。丈は表丈より裾廻し丈を減じたものに、袖の二倍を加へて、尙、胴接ぎの

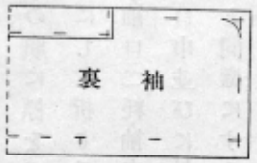
標附け方圖

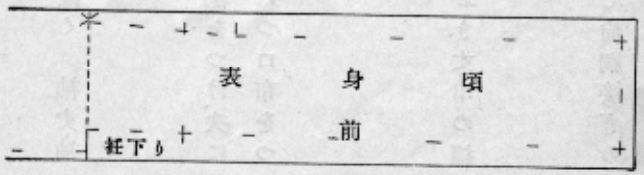






標附け方圖





きせとして、心持寸法を増して標を附ける。

次に胴裏の後身頃を左手に開き、前裾廻しと胴裏の前身頃との胴接ぎの標を合せて、胴裏と裾廻しとを假につないで前身頃の標附をする。

五、**衽**　衽先と裾廻しとを接ぎ合せ二枚を中表に重ねる。そしてその上に表衽を二枚重ねて、衽の二倍だけ裏衽の裾を長くして出しておく。衿下・巾・丈・衿附の標をつけ、褄形の標附をすることは四つ身袷の通りである。

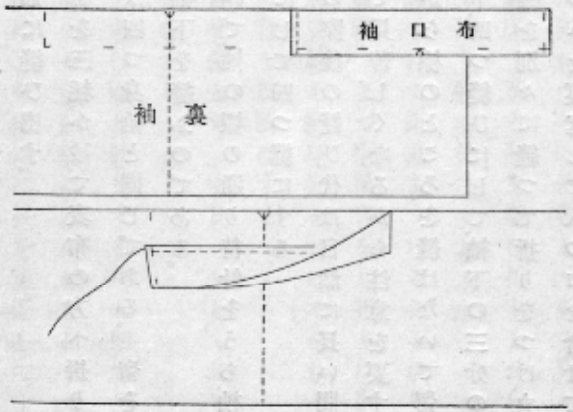
六、**衿**　衿先と裏衿とに接ぎ合せの標をつけ、表衿と重ねて丈・巾・山の標をつける。

㊃　縫ひ方順序

一、袖。二、表身頃。三、裏身頃。四、裾合せ・縫とぢ。五、袖附。六、衿附・共衿。七、裾とぢ。

一、**袖**　裏袖に袖口布をつけるには、廻し掛けとて、袖口布の丈標を裏袖の

袖口の方け掛の布口袖



標に合せ、まづ丈標より縫ひ始めて角の處で抄ひ留をし、標通りに袖口布に折りをつけ、巾に待針をして縦の方を縫ふ。この時袖口布の角を少し斜に抄つて緩める、これは、表返した時のきせの分である。終りも亦かやうにして、丈標を合せて縫ふ。兩角を四角に折つて、袖口布へ折りをつけて、引返して鞍をかける。（但し四つ身袷のやうにしてもよい）

次に表袖と裏袖の袖口明の標を合せて、山に待針を打ち、裏袖の方を少し張り加減にして袖口明に待針を打つ。縫ひ代は表は眞直ぐに、裏は

留の處で標通りに、留より二糎位の間で縫ひ代を凡そ四粍程淺くして裾形に縫ひ出す。

きせを三粍かけて表布の方へ折り、袖口の四つ留をする。四つ留の仕方は四つ身袷と同じである。留をしたならば中で結び合してその糸で袖下を縫ふのである。

次いで、袖の標の通り待針をうち、袖口布の丈までは半返し、又は一針ぬきにして四つ縫にする。

この際、後の縫ひ代は自然に長い間で折り出さないと、袖口下に癖がついて見苦しくなるから注意を要す。又ここにはきせをかけないがよいから標のところを縫はないで留をした布目を通して、縫ふとよい。

以下、四つ縫ひにして、袖下の三分の二位までを縫ひ、それから先は表袖、裏袖を別々に縫つて折りをつけ、丸みを作つて表に返し、更に八つ口の處のみを裏返して八つ口を合せて縫ふ。その際袖下の處は裏を稍張り加減にする。表返して躾をかける。

二、表身頃　背と脇を縫ひ、折りをつける。脇の後の縫ひ込みを自然に開いて折り、躾で押へておく。

衽をつけて折りをつけることは、單衣と同じである。

三、裏身頃　まづ胴接ぎをし、折りは胴裏にむけて隱し躾をする。

背及び脇を縫ひ、衽をつけてそれぞれ折りをつける。但し脊の折りは表の背と反對にする。

四、裾合せ・縫とぢ　丈比べをして、正しく裏身頃を袱の二倍だけ長くし、裾合せをする。

裾をあげ、隱し躾をすること四つ身袷に同じである。

表裏の脊縫・脇縫・衽附の縫ひ目をとぢる。

次に衿下を縫ふに、衽を裏返して下の方から、上へと縫ひ、表へ折りをつけ、引返して躾をかける。

次に脇縫の上部を留めて身八つ口を縫つて躾をかける。

五、**袖附**　四つ身袷と同じにして袖をつける。

まづ山標を合せて待ち針をうち、留をする。袖附の留め方も四つ身袷に同じである。

表の縫ひ代は肩山が五糎の縫ひ代となるやうに折り出して、針を打ち、三枚附にして袖に折りをつけ、裏は標通り二枚附にして折りは身頃へ返す。

六、**衿附・共衿**　身頃の表裏の衿附の標を合せて五糎先を假とぢをし、裏衿に衿先布を接ぎ合せて、裏衿の方へ折りをつける。

本裁女物單衣のやうに衿をつける。共衿のかけ方も同じである。

七、**裾とぢ**　表裾の折り目から五糎程上つた處に(衽を除いて)前巾の裏に三針、後巾の裏に四針出し、表はその外に尙その間にも針目を出して裾とぢをする。

備考　一、裾廻し地として用ひられる織物の種類及びその巾の廣さを問ふ。

二、袖口布廻し掛けの長所を考へよ。

第三章　寢冷え知らず（二・三歳用）

㊀　裁ち方

用布は表・裏とも並巾六十五糎を要す。

各々巾表にして巾を二つに折り二枚重ねて置く。

表裏とも同寸法に裁ち方圖のやうに標をつけて後、一枚づゝ裁ち切る。

外に脇紐として巾四糎、丈四十五糎の物二本と、衿紐として巾三糎、丈四十五糎の物一本、又は同じ丈のテープが要る。

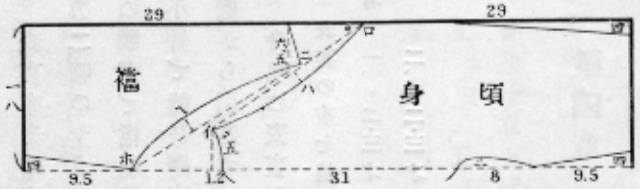
㊁　縫ひ方順序

一、襠。二、身頃。三、紐附。

一、襠　襠布表裏の裾口を縫ひ合せ、表に返して、けぬき合せに躾を掛け、襠の上部の後の方に紐を附け、上部の後ぐりの部分を小針に縫ひ合せ、第一圖のやうな形にする。

寢冷え知らずの裁ち方

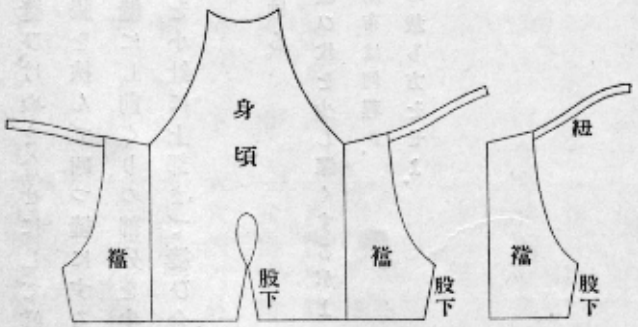
糎65　巾並布用



ハはイロの中央でその十分の一くり取る

ヘはニホの三分の一の處でその十分の一くり取る

第一圖



第二圖

二、身頃　表裏布を中表に合せて裾口を縫ひ、けぬき合せにして襟をかけ、次に第二圖のやうに、身頃の脇で襠の脇を挾んで四つ縫にする。次に身頃の股下で襠の股下を挾んで四つ縫にし、前ぐりの部分を半返しか、又は小針で縫ひ、兩方の脇ぐりの部分を小針に上部まで縫ひ合せ、胸ぐりの處から引返す。

三、紐附　身頃の表裏を整へて衿紐を附ける。

注意　表裏の布を縫ひ合すには裏布の縫ひ代を少し深くするがよい。

備考　一、二・三才用寝冷え知らずの用布は何程か。
　　二、二・三才用の寝冷え知らずの裁ち方をせよ。

第四章　本裁男物袷

㊀　普通仕立上げ寸法

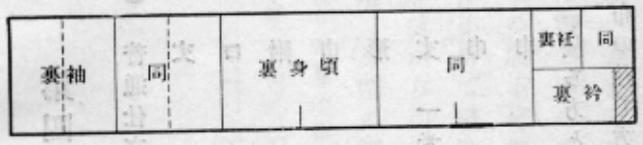
袖丈	五三糎	衽下り	一九糎
袖口	二八糎	衽巾	一五糎
袖附	四四糎	合褄巾	一三糎五粍
袖巾	三四糎	衿肩明	八糎五粍
人形	九糎	衿巾	五糎五粍
身丈	一米三六糎内外	衿下	六六糎内外
後巾	三〇糎	裄	六六糎
前巾	二五糎	裾	四粍位

㊁　裁ち方と積り方

裏用布の裁ち方は本裁男物單衣に同じである。しかし居敷當をとる

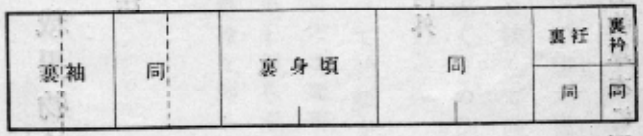
男物裏布棒衽の裁ち方

用布　並巾



積り方

公式　袖丈×4＋身丈×6－衽下り×2＋褄×12＝裏總用布
（裏總用布－袖丈×4＋衽下り×2）÷6＝身丈

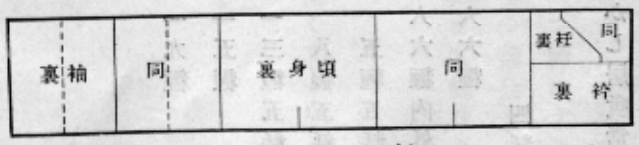


積り方

公式　袖丈×4＋身丈×5－衽下り＋裏衿＋褄×10＝裏總用布
（裏總用布－袖丈×4＋衽下り－裏衿）÷5＝身丈

男物裏布鈎衽の裁ち方

用布　並巾



積り方

公式　袖丈×4＋身丈×5＋鈎下－衽下り＋褄×10＝裏總用布
（裏總用布－袖丈×4＋衽下－鈎下）÷5＝身丈

必要はない

裏用布の裁ち方と積り方は、裾廻し附の物は本裁女物袷に同じで、ただ寸法の違ひがあるばかりである。しかし、男物袷は通し裏の物が普通である。

裏は凡て表に準じて裁つものであつて、後身頃・前身頃・衽とも丈をそれぞれ褄の二倍づゝ長くしておくことは公式に示す通りであるが、總尺の充分ある物は、身丈を長く裁つて、肩に揚をしておけば、裾の切れた時に切り取るのに都合がよい。

この外にまた黒八丈・瓦斯八・洋八・本五日市・瓦斯五日市等の袖口布を要す。

㊂　標附け方

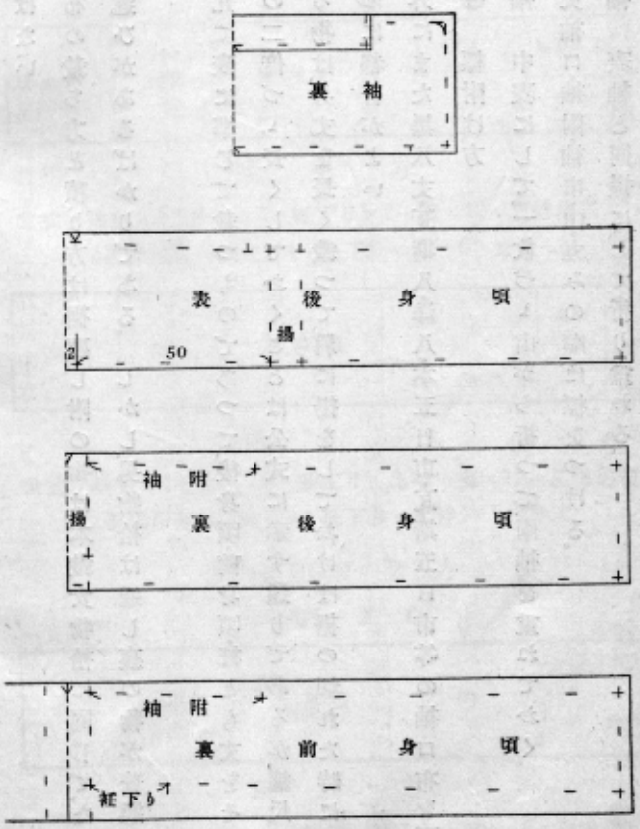
一、表袖　中表にして、一枚づゝ山から折つて、兩袖を重ねておく。

袖丈・袖口・袖附・袖巾・山・丸みの順に標をつける。

二、裏袖　表袖と同樣にして折り重ねる。

妻大圖

圖方け附標



表袖より、袖丈二粍、袖口二粍、袖巾は袖下のみ二粍つめ、他は表袖と同じに標をつける。

次に袖口布を重ねて、袖口布掛の標をする。

袖口布の地質の厚い物は、その丈を縫ひ代だけずらして、外袖の方を長くしておく。

三、**表身頃**　本裁男物單衣に同じく、揚の標附等も單衣物と變りがない。

四、**裏身頃**　すべて表身頃に準じて標を附ける。

通し裏の物は、身丈を表より袵の二倍だけ長くし、肩に標をつけて殘りは揚にする。そこから計つて袖附及び衽下りの標をつける。

裾廻し附の物は、胴裏及び裾廻し布を本裁女物袷と同じやうに扱ふ。

五、**衽・衿**　衽は女物袷に、衿は男物單衣と同じである。

㊃　縫ひ方順序

一、袖。二、表身頃。三、裏身頃。四、裾合せ・縫とぢ及び衽附。五、袖附。

六、衿附・共衿。七、裾とぢ。

一、袖　裏袖に袖口布をかけるには、女物袷のやうに廻し掛けにする。表・裏の袖口の標を合せ、山に待針を打ち、裏袖の方を少し張り加減にして待針を打つ。

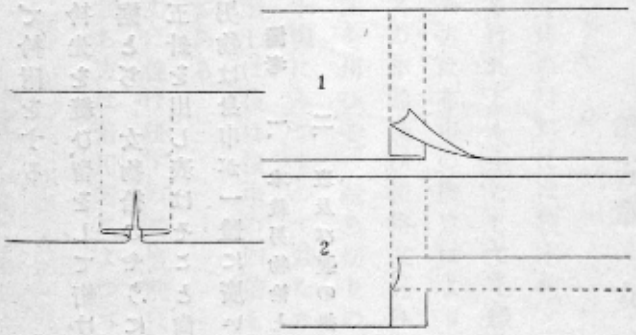
縫ひ代は、表は眞直ぐに、裏は留の處で標通りに、留から二糎位の間で縫ひ代を凡そ四粍程淺くして、褄形に縫ひ出す。表に返して袖口袱を整へる。

袖口の四つ留をして、人形の五糎位手前まで四つ縫ひにし、それより先は表裏別々に縫つて開いて躾をかけ、丸みを作つて返す。

二、表身頃　背縫・揚・脇縫・衽附等をして、折りをつけ、揚の仕末をすることは男物單衣と同じである。

三、裏身頃　揚は肩山を衿肩明まで標通り摘み縫にして、一圖のやうに後に折つて隠し躾をかけ、衽附の標より八粍程外を折つて躾をかけてお

圖の方仕の揚裏



く。揚の多い物は二圖のやうに縫ひ目を割つて隠し躾をかける。

次に背縫及び脇縫をして、折りをつけ、脇の縫ひ代を開いて躾をかける。

四、裾合せ　丈比べをして、正しく裏身頃を袱の二倍だけ長くして裾合せをし、褄をあげ女物袷のやうに裾の整理をし、縦とぢをして、次に衿下を縫ふ。

五、袖附　山を合せ袖附の四つ留をし、表は身頃を折つて袖をつけ、裏は身頃と袖とを合せて、女物袷のやうに袖附をする。

六、衿附・共衿　女物袷のやうに、衿附の標の五粍外をとぢ合せて、表・裏の衿で身頃を挾ん

で衿附をする。

衿先を縫ひ、留をして衿付、共衿をかけることは男物單衣に同じである。

七、**裾とぢ**　女物袷のやうにする。しかし、針目は前巾の裏に四針、後巾に五針を出し、表はそこと、尙その間にも針目を出す。

男物は身巾が一體に廣いから女物より一針多くするのである。

備考　一、本裁男物袷と女物と異る所を述べよ。

二、表及び裏の揚の仕方を說明せよ。

第五章　女　袴

女袴の材料には、綾木綿・メリンス・セル・カシミヤ・紬・琥珀織・精好織等、種々あるけれども、主として毛織物が多く用ひられる。

裁ち方は、布巾の廣さにより、又大・中・小等種類が多い。特に紐下の丈は、着用者の年齡及び體格又好みによつて、長短のあるものなれば、各自、適當な寸法を用ひる。裁ち切りの丈としては、裾衩と紐附の縫ひ代を少なくとも、十糎にみつもつて裁たなければならない。

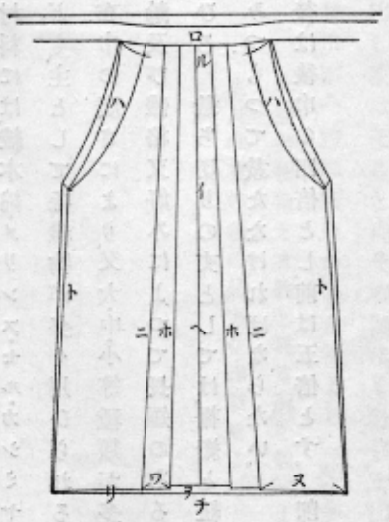
蹴廻しは、後は後巾の四倍とし、前は五倍とす。即ち後巾の九倍が總蹴廻しである。

紐丈は後は紐下の二倍、前は紐下の三倍とす。

尙裁ち方は着用者によつて、種々應用工夫することが肝要である。

女袴各部の名稱

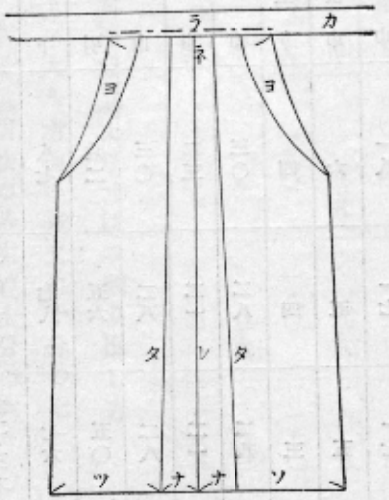
前



イ紐下
ロ前笹襞紐
ハ前笹襞
ニ一の襞
ホ二の襞
ヘ三の襞
ト相引
チ蹴廻し
リ前巾
ヌ前脇巾
ル前腰巾
ワ切り上げ
ヲ前寄襞巾

女袴各部の名稱

後



カ後紐
コ後笹襞
タ一の襞
レ二の襞
ソ後巾
ツ後脇巾
ネ後腰巾
ナ後寄襞巾
ラ飾り糸

㊀ 女袴普通仕立上げ寸法

名稱＼年齡	大人	十四・五才	十二・三才	八・九才	五・六才
紐下	八七	七八	七六	六二	五三
相引	六二	五六	五〇	四六	四〇
後巾	三〇	二八	二八	二三	二一
後脇巾	二三	二一	二一	一七	一六
後腰巾	三〇	二八	二八	二五	二三
後の重り	四	四	三	三	三
後笹襞巾	六	五	五	四	四
前脇巾	一八	一七	一七	一四	一二
後寄襞巾	上四 下八	三・五 七	三 六	二・五 六	二・五 五
前寄襞巾	上三 下五・八	三 五・八	二・五 五・八	二・五 四・八	二・五 四・五
前腰巾	三二	三〇	二八	二六・五	二五
前笹襞巾	四・五	四	四	三・五	三・五
前の重り	四	三	三	三	二・五
後紐巾	五・五	五・五	五	四・五	四・五
後紐丈	一九〇	一八〇	一七〇	一五〇	一三〇
前紐巾	三・五	三・五	三	三	三
前紐丈	三〇〇	三〇〇	二八五	二六五	二三〇

㊁ 女袴仕立上げ寸法の割り出し方

紐下　大人着物の着丈の十分の七
　　子供着物の着丈の十分の六

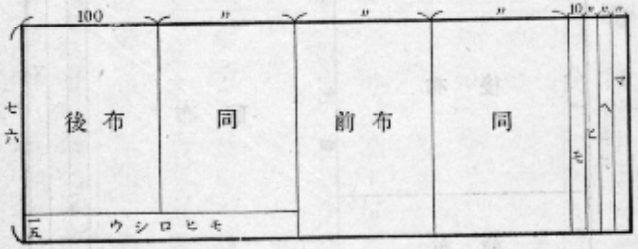
相引　紐下の三分の二に三糎加へる

後巾　着物の後巾に二糎加へる

後脇巾　後巾の四分の三
後寄襞巾　上は後巾の八分の一、下は後巾の四分の一
後腰巾　後巾と同寸
後笹襞巾　後脇巾の四分の一
前脇巾　後巾の五分の三
前寄襞巾　上は後巾の十分の一、下は後巾の五分の一より二耗減ず
前笹襞巾　前脇巾の四分の一
前腰巾　後巾より二糎廣く或は同寸
後紐巾　後巾の五分の一弱
前紐巾　後巾の八分の一位
後紐丈　胴廻りの約二倍半
前紐丈　胴廻りの約四倍

三　裁ち方と積り方

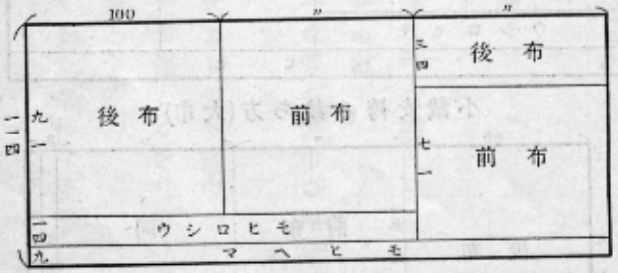
大人女袴の裁ち方(大巾)



積り方

公式　後布丈×4＋前紐巾×4＝總用布

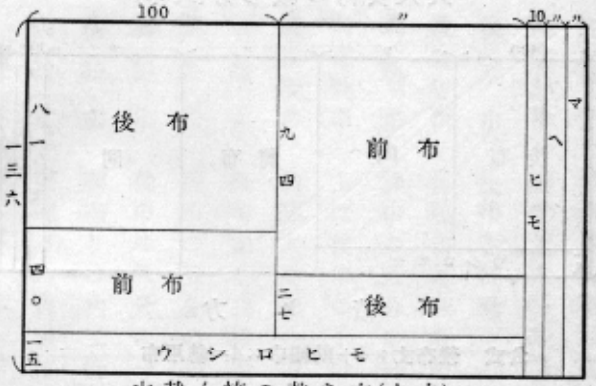
大人女袴の裁ち方(三巾)



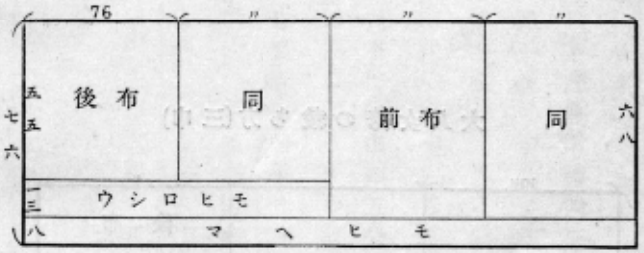
積り方

公式　後布×3＝總用布

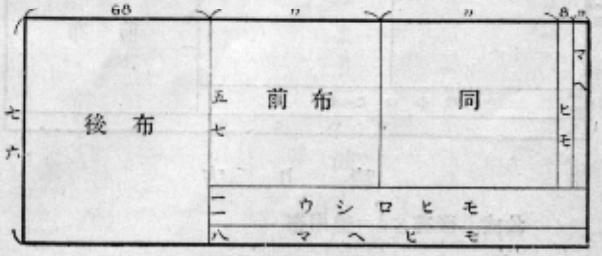
大人女袴の裁ち方(四巾)



中裁女袴の裁ち方(大巾)

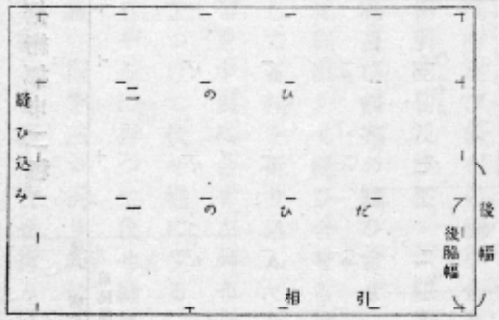


小裁女袴の裁ち方(大巾)



四　標附け方

後布標附け方圖



後布

一、裾絎標、巾二糎。

二、丈標。

三、相引の丈と縫ひ代の標。

四、中央縫ひ合せの標。

五、後脇巾即ち一の襞を後巾の四分の三に標す。

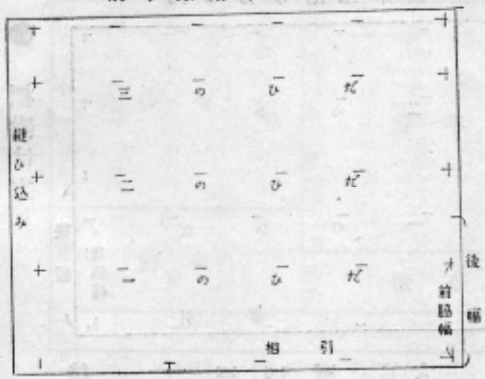
六、相引の縫ひ代より先へ後巾を假に計り、それから中央の標までを二等分する。これを二の襞とする。

七、上の布一枚を取りのけて、重ね襞の標をする。これは後巾の十分の一だけ中央に寄せてつける。

前布

前布二枚を中表に重ね、裾口を右に相引を手前に置く。

一、裾紐標、巾二糎。



二、丈標。

三、相引の丈と縫ひ代の標。

四、中央縫ひ合せの標。

五、一の襞を後巾の五分の三に標す。

六、後と同じ様に相引の縫ひ代より假に後巾を計り、それから中央の縫ひ合せ標までを三等分し、次に中央からその三分の一の寸法の處を三の襞とする。

七、三の襞と一の襞の中央を二の襞とする。

㊄ 縫ひ方順序

一、後布及び前布の縫ひ合せ。二、裾紐。三、襞取り方。四、笹襞取り方。五、相引、門留及び壁。六、紐紐。七、前紐附。八、後紐附及び飾り糸。

一、後布及び前布の縫ひ合せ　後布の表を中にして合せ、左脚になる布を五糎程出して縫ひ合せる。折りは着物の脊縫の折りと反對につける。そして五糎を折り込んで、折り伏せ縫にする。

前布を中表に合せ、左脚布を右脚布より五糎出して縫ひ、右脚の方に折りをつけて、伏せ縫にする。もし前布が三布の場合は、中央へ折りのかかるやうに折つて、伏せ縫にする。

二、裾紐　裾を三つ折り紐にする。もし裾廻し布をつけるならば、裾廻し布と裾とを縫ひ合せ、折りは裾廻し布の方へつけて隠し躾をかけ、表布を五糎程折り返して裾廻し布の端を表に紐けつける。

三、襞取り方

後襞の取り方　イ、まづ後布左右とも標通りに、一の襞及び二の襞の折りをつける。左脚の方は、二本の標の内中央に近い方を折る、これを重ね襞といふ。

ロ、中央の縫ひ目の上に左脚の二の襞標を合せる。即ち重ね襞は中央より、四糎程を右脚の方へ寄せて、重ねるわけである。

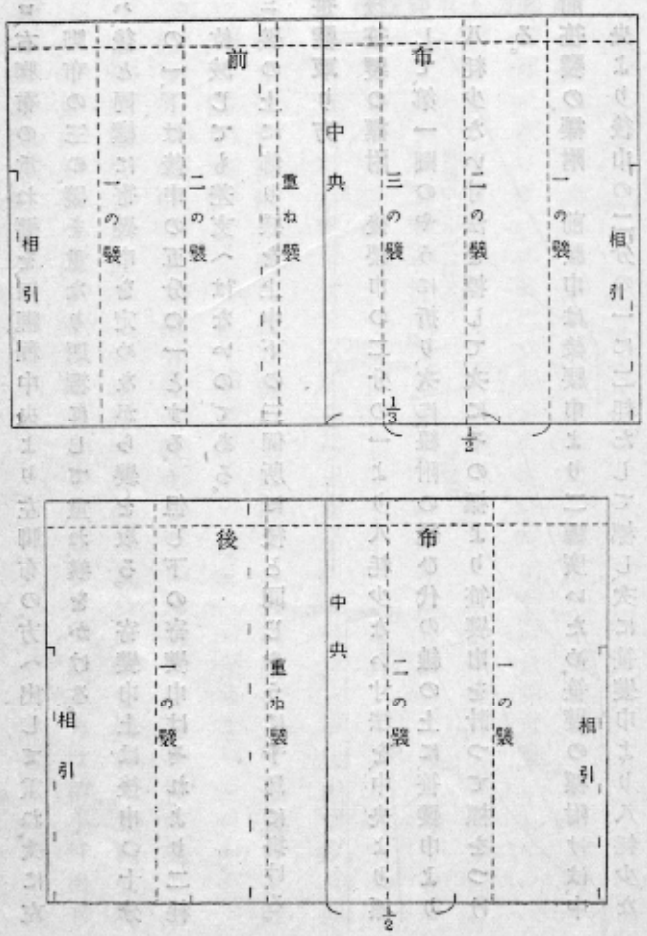
ハ、次に右脚の二の襞山を左脚の二の襞標に重ねる。即ち後の重り四糎となる。

ニ、次に寄襞巾を定め、一の襞を作る。即ち寄襞巾上は三糎八粍、下は七糎五粍とする。襞の上の飾り紐を上中下の三個所に千鳥に掛ける。

前襞取り方　イ、一の襞二の襞及び三の襞を標通りに折る。

但し右脚布の三の襞は重ね襞となる故、二本の標の内中央に近い方を折る。

圖の取り襞



ロ、右脚布の重ね襞を、四糎程中央より左脚布の方へ出して重ね、次に左脚布の三の襞を重なり四糎にして重ね、躾をかける。

ハ、後と同様に寄襞巾を定めながら襞を取る。寄襞巾上は後巾の十分の一、下は後巾の五分の一とする。但し下の寄襞巾はそれより二糎位減じても差支へはないのである。

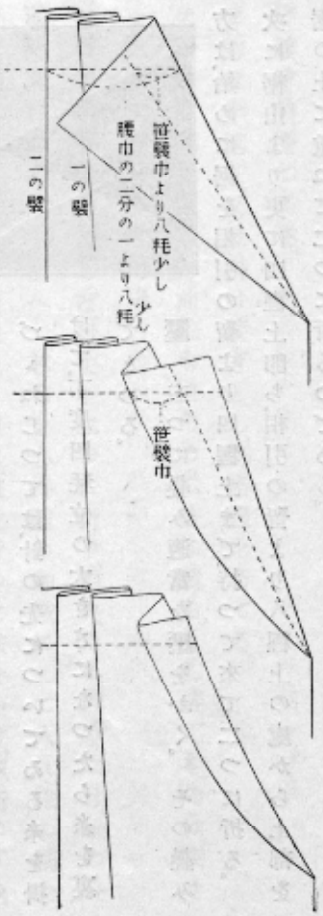
ニ、襞の上に飾り躾を上中下の三個所に後と同じやうに千鳥に掛ける。

四、笹襞取り方

後笹襞の標附　後腰巾の二分の一より八糎少ない寸法を、中央より標して、第一圖のやうに折り、次に、紐附の縫ひ代の線の上に、笹襞巾より八糎少ない寸法を標して、次にその標より笹襞巾を計つて標をつける。

前笹襞の標附　前腰巾は後腰巾より二糎廣いため、笹襞の標附けは、中央より後巾の二分の一に二糎たして標し、次に笹襞巾より八糎少ない寸法を紐附の縫ひ代の線の上に標す。次に出來上り笹襞巾を計つて標をつける。

圖の方り取襞笹後



作り方　標附の通り、相引留の際まで、少し丸みを持たせ、笹の葉の如き形に格好よく折りをつけ、形が整つたならば、中を開いて二糎五糎の針目にし、外へ出る針目は、小さくしてとぢつけ、下方は稍小針にし次に裏側を新ける。

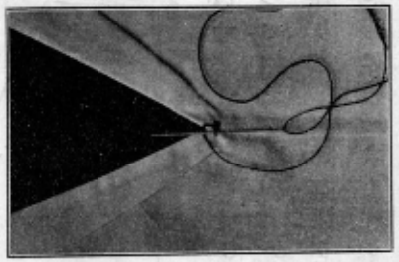
五、**相引、閂留及び壓**　相引を縫ひ合せ、始め終りとも十糎返し留にし、折りは前布につけ、裾紮の紮け殘した處を紮ける。

閂留　相引の上の端に四糎位の大きさに、閂留をする。

閂留の仕方　圖のやうに閂留の巾に糸を二三本渡して、針をその糸の下をくぐらし、一つづゝねじつては、針の先についてゐる糸を掛けて、丁度四粍位の大きさになつたら糸を裏でとめる。

壓　三つに疊み適當な壓をおく。その疊み方は、始めに裾を相引の留より四糎上まで、持つて來て二つに折る。次に裾山より更に四糎上即ち、相引の留より八糎上の處から上部を裾の上に重ねて二つに折るのである。

圖の閂留



六、**紐紮**　紐を接ぐものはなるべく、着用して接ぎ目の目だたぬやうな位置で接ぎ目をつくる。

接ぎ方は半返し、又は掛け接ぎとし、割烙鏝をあてる。

紐芯を裁つには、後紐も前紐も紐巾の二倍に裁ち、もし接ぐものは、突き合せ接ぎ、又は重ね縫にする。

芯の用意が出來たならば、紐丈を二つに折り、中央に糸標をつけ、紐の一方の裁ち目に芯布を揃へて、芯布を心持弛め加減にして入れ、紐の端を縫ひ、紮け代を折り、次に出來上り巾に、紐を折つて躾をかけ、本紮にする。

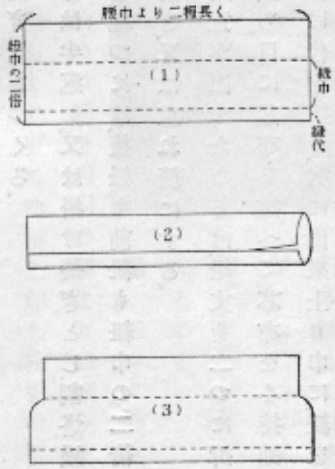
但し中央三十七、八糎殘して紮ける。

七、**前紐附**　前紐の紮け殘した處へ美濃紙を紐巾の二倍に折つて、とぢつけ、前紐の中央と前腰巾の中央とを合せ、よくつり合を見て、待針を打ち、半返し縫にする。この時三の襞より端まで六粍程紐附を上げてつける。紐の厚さを一樣にする爲に、小切を入れて、平にして紮ける。

八、後紐附及び飾り糸

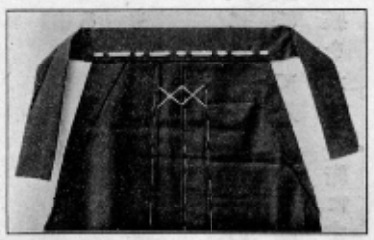
後紐附　腰板紙を、巾は後紐巾の二倍、丈は腰巾より三糎位長く裁ち、第一圖のやうに、縫ひ代一糎にして、通し篦をつけ、次に紐巾を計つて、通し篦をして、第二圖のやうに折り目をつけて、兩端を一糎位丸く裁ち落し、内側の方を少し丈短く、第三圖のやうな形に裁ち切る。

圖の方ち裁板腰



後紐の中央と厚紙の中央とを合せて、後紐にとぢつけ、飾り糸を通す。

圖の糸り飾



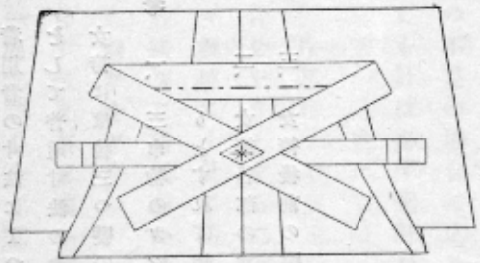
飾り糸　飾り糸は、大白の捻り糸の、左捻り、右捻り二本を下の角より一糎上つた處に、圖のやうに、雄針、雌針に通す。

後紐の中央と腰紙の中央とを合せ、笹襞のゆるまぬやうに注意して待針を打ち、腰板縫ひ代の折り角より五粍上をあらく、半返しにして縫つけ、縫ひ込みをとぢつけて、後紐の紐けの殘した處を紐ける。

七　仕上げ

出來上つたならば、火熨斗をかけ、壓をおいた時のやうに、三つ折りに紐を疊み、上圖のやうに組み合せて、飾りとぢをし、前紐の兩端に半紙を二糎巾に裁ち切つて卷きつける。

圖の上り來出



注意

一、中裁、小裁の袴は紐下を長く仕立てて置き、

着用者の寸法によつて揚をする。卽ち相引を長く仕立てゝおいて、揚をして普通寸法の相引とする。筐襞等には變りがない。

二、女袴には後三つ襞の外に、大紋腰とて、後襞を一つに作るものもある。

備考　一、三巾物のカシミヤで大人女袴を裁つに、後丈一米五糎の裁ち切りとすれば總用布何程を要するか。

二、女袴各部の寸法割り出し方を述べよ。

三、女袴後前の襞の取り方を問ふ。

第六章　綿布の繕ひ方

繕ひ方とは接ぎ方繼ぎ方等のことで、衣類に損所が出來た時に繕つたり、又布の不足の場合に、之を補ふ爲にする方法である。

木綿物でも針は必ず絹針を用ひ、糸も極く細く地質と同じ色のものを用ふ。

㊀　片返し

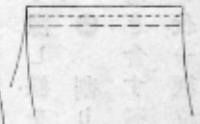
接ぎ合せやうとする二枚の布の縞目・布目を合せて躾でとぢる。

縫ひ代一糎位に小針に縫つて、きせを極く少しかけて縫ひ込みを一方へ折り、隱し躾をし、烙鏝をかけて仕上げる。

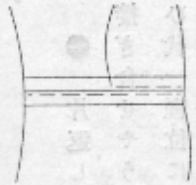
㊁　割り接ぎ

接ぎ合すべき布を揃へ、縞目・布目を正しく合せて躾でとぢる。

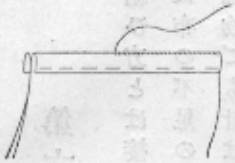
縫ひ代一糎位に小針に縫ひ、縫ひ目を割つて兩端に隱し躾をし烙鏝をか



圖の　ぎ　接



割り接ぎ



圖の　ぎ　接　け　掛

けて仕上げる。

注意　一、絹糸を用ひてもよい。

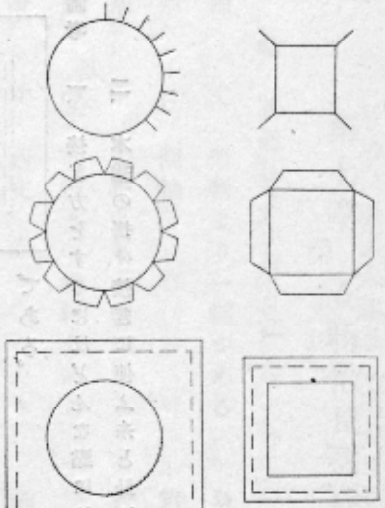
二、メリンス等の仕方もこの接ぎ方による。但し縫ひ目の處に一寸巾の絹布をあて、その上を縫ひ合す。

㊂　掛け接ぎ

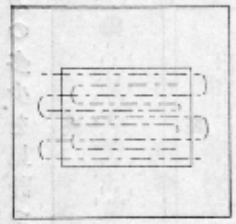
縞目・布目をよく合せ、縫ひ代七粍位を裏の方へ折る。布の表を中にして二枚合せ、躾でとぢる。一方を懸針にかけ、羽二重糸、又は絹糸の割り糸を用ひ、横糸一二本づゝを抄つてまとつてゆく。躾糸を取り、烙鏝で仕上げる。

㊃　穴繼ぎ

焼穴・鈎裂等の出來た時の繼ぎ方で、先づ損所を圓形、或は方形に切り去り、方形には四角に、圓形には周圍に切り込みを入れ、格好よく裏へ返して、その穴よりも一糎位大きい共切をあて、縞目・布目をよく合せて周圍に躾をかけ、表から損所を丁寧に折つて躾をかける。



圖の　ぎ　繼　穴



圖の　ぎ　繼　紙　色

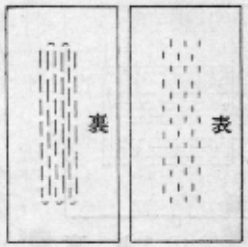
裏から穴の周圍を表に針目の分らないやうにまつり、烙鏝を用ひて仕上げる。

㊄　色紙繼ぎ

地質の弱つた處へ、その部分より少し大きい共切か、又は他の布をあててその廻りをとぢつける。損

じ方の多少を見計つて共色の繼ぎ糸で、當て切の端よりも一針先から圖のやうに繼ぐ仕方である。

圖の ぎ繼し刺



六　刺し繼ぎ

刺し繼ぎは地質の少し弱つた處を解し糸か、又は共色の細い糸で織地にならつて刺し繼ぐ方法である。

備考　一、接ぎ方をするにはどんな點に注意すればよいか。

二、木綿の掛け接ぎに使ふ糸と針について述べよ。

第七章　女物袷長襦袢

一　普通仕立上げ寸法

袖丈	着物より一糎つめる	身八つ口	後一二糎 前一六糎		
袖口	濶袖	衿肩明	着物より四糎つめる		
袖附	着物より一糎つめる	衿巾	廣衿一一糎五糎		
袖巾	着物より四糎つめる	衿下	上五糎五糎 七糎五糎		
身丈	着丈	前の弛み	四糎以上		
後巾	着物と同寸	裾	着物より四糎つめる		
前巾	着物より四糎廣く		又は同じ		

二　裁ち方と積り方

袖丈の四倍と身丈の四倍と、それに衿用布を加へたものが總用布である。

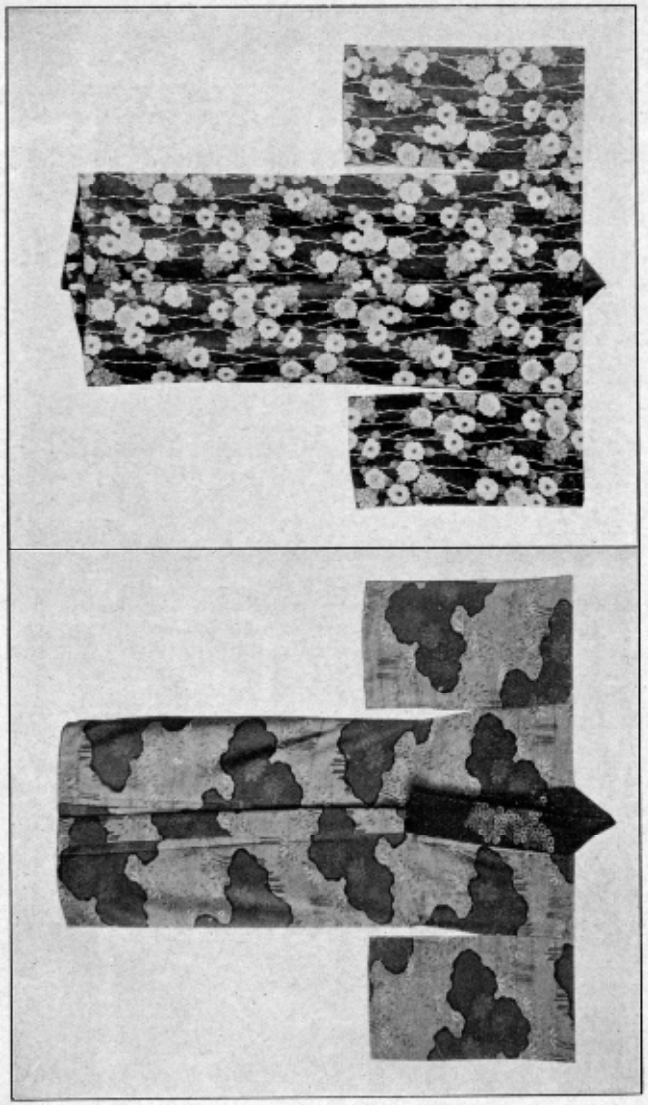
衿用布は着物と違つて、前身頃の下からつくものであるから、身丈に衿先縫ひ代・衿肩明・前の弛み等を加へたものが片方分でそれを二倍したものが總丈である。而して山で接ぐものは、接ぎ代をも見つもつておかなければならない。

圖に示す寸法は普通寸法であるから、各自袖丈は上着の袖丈より一糎位短く裁ち、身丈は着用者の着丈によつて定めるものである。けれども、用布の都合によつては長く裁ち、内揚をしておいてもよい。

廣巾物で裁つ場合はつまみ衿にしておいてもよく、又は後巾を肩巾の足りる程にして殘りを衿にする。衿丈は足りないから中央に足し布を用ふ。

裾廻し丈は普通着物よりは少なく二十五糎位とし、胴裏の裁ち方は、着物と同じである。

袖裏は表に準じて胴裏と別品を用ふ。



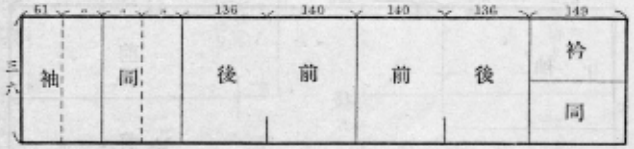
長襦袢　袖

長襦袢　衿

妻大圖

長襦袢の裁ち方

用布並巾



積り方

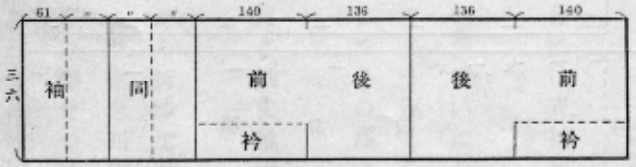
公式　袖丈×4＋後丈×5＋前の弛み×2＋衿肩明及び衿上下の縫ひ代＋前の弛み＝總用布

{總用布－(袖丈×4＋前の弛み×2＋衿肩明＋上下の縫ひ代＋前の弛み)}÷5＝後身丈

後丈＋前の弛み＝前丈

摘み衿長襦袢の裁ち方

用布並巾



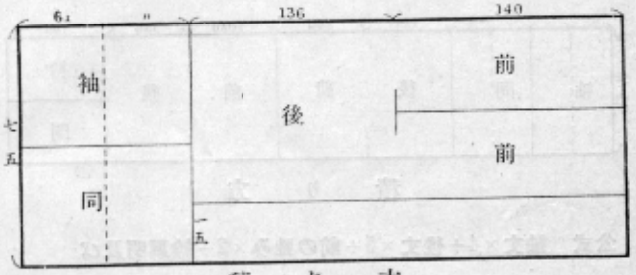
積り方

公式　袖丈×4＋後丈×4＋前の弛み×2＝總用布

(總用布－袖丈×4－前の弛み×2)÷4＝後丈

長襦袢の裁ち方

用布大巾

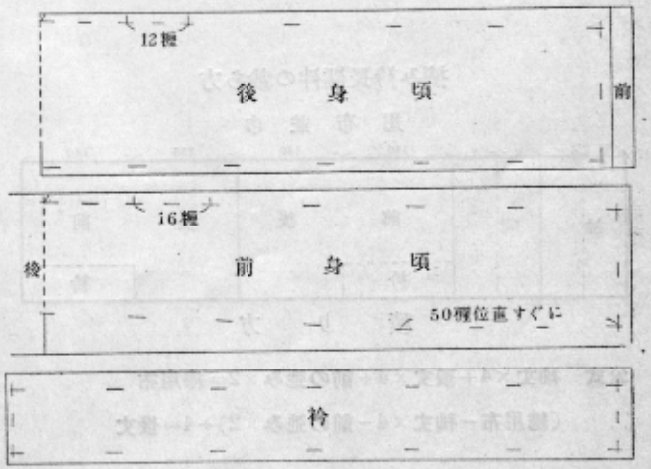


積り方

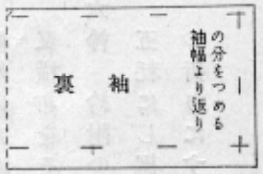
公式　袖丈×2＋後丈×2＋前の弛み＝總用布

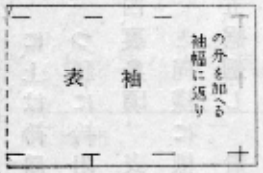
{總用布－(袖丈×2＋前の弛み)}÷2＝後丈

標附け方圖



㊂　標附け方





一、袖　袖口をけぬき合せにする場合には、表袖・裏袖とも同じに標を附ける。

又、大名袖とて、表袖巾の縫ひ代をいつぱいにしておき、その中から仕立上げの袖巾を計つて裏へ返る分とし、裏袖は表袖の返りの分を袖巾から減じて、その残りを裏袖巾として標をつける。

縫ひ込みは八つ口の方へ入れて置き、袖丈・袖附・山の標をつける。

二、後身頃　中表にして二枚合せ、肩から折つて前身頃を下に、後身頃を上に、前身頃は後身頃より裾を四糎出して置き、身丈・袖附・身八つ口・後巾・肩巾・山等の標をつける。

三、前身頃　後身頃を左に取りのけ、前身頃を出し、身八つ口の標を四糎下

げてつける。前巾の標の附け方は、寸法通り裾から五十糎ほど眞直ぐに、上は衿肩明の處から糸を引張り、肩から十二糎の處に丸みを持せつつ斜に衿附の標をする。

四、**裏身頃**　表身頃より袵の二倍だけ長くするばかりで、その他は表身頃と同樣に標をつける。

五、**裾廻し**　着物の裾廻しと變りがない。もし横布を附ける時は脊から二つに折り、背の縫ひ代を定め、次に後巾を計り、脇の縫ひ代を取り、次に標附け方圖に示すやうに前巾の標附をする。又横布をそのまゝ縫ひ目なしに使つてもよい。

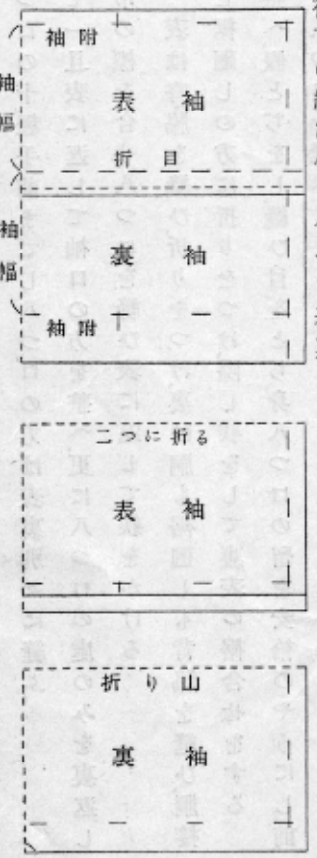
六、**衿**　衿附の縫ひ代をいつぱいに標し、次に衿巾を衿肩明の間は十一糎五粍にし、裾では十五糎の巾にしてその間にも斜に標をつけ、而して二つ折りにするのである。

㊃　縫ひ方順序

一、袖。二、身頃。三、袖附。四、衿附。五、袵とぢ。六、前の弛み。七、半衿掛け。

一、**袖**　表袖と裏袖との袖口になる方を合せて縫ひ、折りは裏袖の方へ返す。きせ山から五粍の處に二糎五粍の針目に隱し躾をする。次に袖下の縫ひ代を合せて表裏それぞれ合せて待針を打ち、それより袖口の折り山から二つに折り、表裏を合せて待針を打ち直す。この時

圖の方ひ縫の袖



一方の袖のみ出來上らぬやうに、折り方に注意する。袖下の四つ縫ひを八つ口の十糎手前まで、八つ口の方は表裏別々に縫ふ。そして一旦表に返して袖口の方を整へ、更に八つ口の處のみを裏返して、袖巾の標を合せ八つ口を縫ひ、表に返して躾をかける。

二、身頃　表は脊脇を縫ひ、折りをつけ、裏は胴も裾廻しも背脇を縫ひ、胴接ぎをし裾廻しの方に折りをつけ、隠し躾をして裏表の裾合せをする。袵を整へ、假とぢをし、縫ひ目をとぢ、身八つ口の留を女袷のやうにし、前後の身八つ口を縫ふ。

三、袖附　袖附及び留め方は女袷に同じ。

四、衿附　前身頃の表裏をよく合せて、縫ひ目の際を躾糸で假縫ひをし、衿及び身頃の標を合せて待針をし、三枚一度に縫つて衿をつけ、衿先を縫ひ、折りをつけ三つ衿を入れて衿を新ける。

五、裾とぢ　裾とぢは後身頃に五針、前身頃に四針を出す。

六、前の弛み　前の弛みは身八つ口で四糎長くなつてゐるからその分だけ身八つ口下で摘み表身頃に針目を出してかがつて置く。

七、半衿　半衿に芯を入れ、裏衿附けて拵へ、本衿に新けつける。

備考　一、前の弛みは何の爲につけるか。

二、縮緬並巾物で女袷長襦袢を裁つに袖裾廻しとも無雙にするときは各部の寸法はどうしたらよいか。又用布の總丈を求む。

但し普通寸法を用ふ。

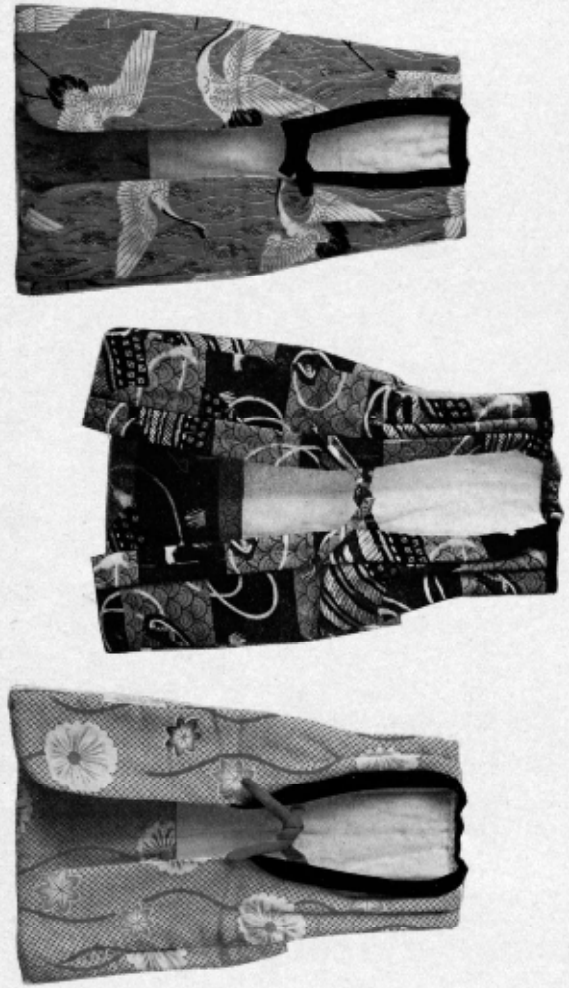
第八章　一つ身袖無し綿入羽織

一・二才用の羽織として、普通は袖無し綿入羽織を多く用ふ。

㊀　普通仕立上げ寸法

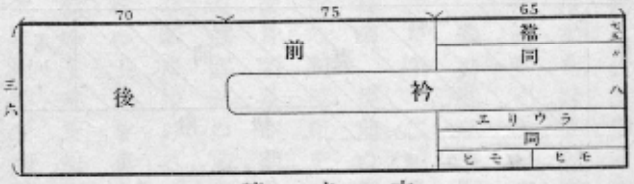
身丈　五五糎　　衿巾　四糎
身巾　いつぱい　　紐丈　二三糎
衿肩明　四糎　　紐巾　一糎二粍
脇明　二三糎　　紐附　二〇糎
襠巾　下三糎五粍　上五糎五粍　　前下り　なし或は五粍

㊁　裁ち方と積り方



一つ身袖無し綿入羽織

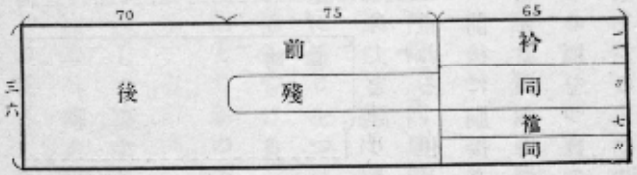
一つ身袖無し羽織の裁ち方（一）



積り方

公式　{用布－（前後の差＋襠丈）}÷2＝後身丈

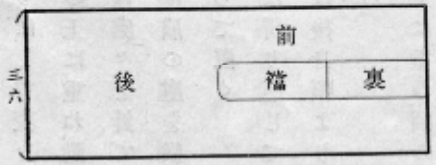
（二）



積り方

公式　{用布－（前後の差＋衿丈）}÷2＝後身丈

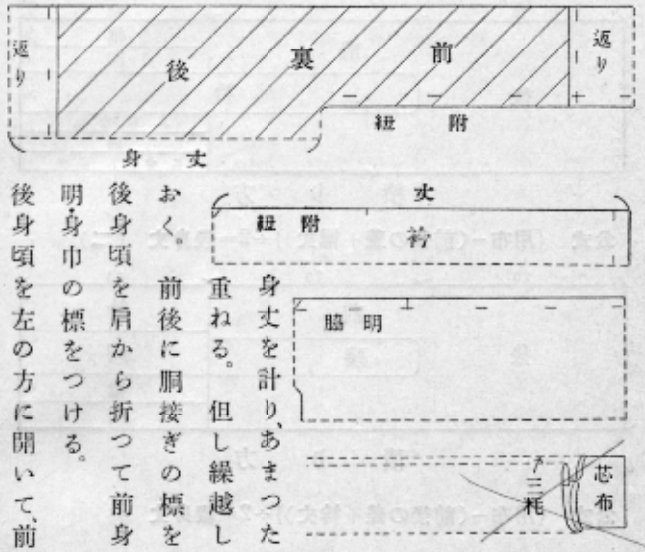
裏の裁ち方



積り方

公式　出來上り身丈×4－表裁ち切り身丈×2＋（前後の差＋縫ひ代）×2＝裏總用布

圖　方　け　附　標



襟の図を入れる。

㊂　標附け方

一、身頃　表裏共に巾を二つ折りにして表を下に、裏をその上に重ね、動かないやうに處々を針で留めるか、又は肩の處を躾で表裏をとぢて置く。

身丈を計り、あまつた表布は折り返して裏の上に重ねる。但し繰越しの分は後身頃より長くしておく。前後に胴接ぎの標をつける。

後身頃を肩から折つて前身頃の上に重ね、圖の樣にし、脇明、身巾の標をつける。

後身頃を左の方に開いて、前巾、紐附の標をつける

二、襟　表裏別々に中表に合せ、表襟の上に裏を重ねておく。

襟丈を計り、表布を折り返して裏の上に重ね、胴接ぎの標をつけ、後襟附は眞直ぐにして、前襟附で斜に曲げて襟巾の標をつける。

㊃　縫ひ方順序

一、身頃。二、綿入。三、衿附。四、肩揚、脊守り。

一、身頃　後前の胴接ぎをして裏に折りをつけ、隱し躾をかける。

襟の胴接ぎをして裏に折りをつけ、隱し躾をかける。

後身頃及び前身頃に襟をつける。この際、標附け方の處で説明した如く眞直ぐの方を後襟附とし、斜の方を前襟附とする。折りはどちらも身頃につける。

襟の上部を裏に折り返して裏より留をする。

襟の上部を丈標より四耗外側を縫ひ、含み綿をする。

次に脇明を表は標より四耗外を、裏は標より四耗内を合せて縫ふ。こ

の際留より三糎位の間で自然に斜に縫ふ。折りは裏につけ隠し躾をする。そして表に返すと出來上りの巾には變りがなくて留の處で裾形のやうになる。

二、綿入　裏返して後身頃を外に前身頃を中にして襠巾の中央より正しく折り、表布の裏を出して廣げる。

眞綿をよく延して全體をつれないやうに引く。

そして小袖綿を三枚位の厚さに入れる。肩や裾は十糎位づゝ兩脇は前巾だけ長く綿を切る。

裾は一枚芯を入れて折り返し、その上に眞綿をひいて衿肩の處から中へ手を入れて引き返す。

前身頃も後身頃と同じやうにして左右とも綿を入れて表に返す。次によく綿を含め、裾の假とぢをし、次いで衿附の裏の巾を少しゆるめ加減にしてとぢる。

紐は巾四糎、長さ二十三糎位の布の中に綿をいれて二本衍け上げ、肩から二十糎下つた處の裏身頃に縫ひ附ける。

三、衿附　前身頃の裏に衿の表を合せる。そして、まづ脊から衿肩廻し及び紐附までは衿を弛め加減にし、それから下は平な調子に待針を打つて、裾の方五糎位を半返しに、外は全體一針拔にして縫ふ。

烙鏝をかけ、身頃に三糎、衿に四糎のきせをかけて折り、次に衿先の標より五糎先を縫つて、衿の表に折りかへし、留をして綿を入れ表に返して、衍け上げる。

紐附の少し上まで衿の中央に飾り躾をかける。

兩方の前襠附を縦とぢする。

四、肩揚・脊守り　肩巾の眞中を山にして、二糎の深さに、山から十七糎位即ち脇明の凡そ三分の二位の處まで肩揚をする。

前の方は下へ行くほど次第に淺く揚をする。

適宜に脊守りか、又は背紋を縫ふ。

注意　前下りをつける時は、別に前下りを縫はず胴接ぎの處で前下りの分を斜に標をつけて縫ふ。この仕方は表が澤山返るものは出來ない。

備考　一、並巾二米十糎の布で一つ身袖無し羽織の裁ち方をせよ。

二、一つ身袖無し羽織の裁ち方一圖と二圖とを比較してその長所短所をあげよ。

模範裁縫教科書　卷二　終り

大正十五年十二月十四日印刷
大正十五年十二月十七日發行

模範裁縫教科書卷二
定價金三十二錢

著作者　大妻コタカ

發行兼印刷者　東京市麹町區大手町一丁目一番地　株式會社三省堂　代表者　神保周藏

印刷所　東京府荏原郡蒲田町　株式會社三省堂印刷部

發行所　東京市麹町區大手町　株式會社三省堂　電話牛込七二六三（振替口座東京二三五三）

不許複製